

読むたびに新たな気持ちに

荒川区立第二日暮里小学校五年

沖田 胡桃

柳田先生、こんにちは。

私は、「おおきな木」を読みました。この本を読んで、話がとても深くて、読むたびに感じ方が変わり、考えさせられる絵本があるんだなということに気づきました。

初めて読んだ時は、なんて悲しい話なんだろうと思いました。木が、いくら好きな人のためとはいえ自分のものをあげ続けて、ついに切り株になってしまうことがせつなく、ボロボロ泣いてしまいました。

次に読んだ時には、少年にとっても腹がたちまし

た。わがままで、木の気持ちも考えずに、ほしいものだけはもらって去っていく身勝手な少年が、ひどすぎると思ったからです。

今回またこの本を読んでみたら、自分をぎせいにしてまでものを与え続け、ただただ少年の幸せを願う木の思いに感動しました。少年が幸せならそれでいい、少年の幸せが一番の幸せだと思えるほど少年のことを愛しているんだな、と思います！ 私はそんな木が母親のように感じたので、お母さんに、

「こどもを思う気持ちはどんなものなの？」と、聞いてみました。そうしたら、

「母親は、子どもにつらいことや悲しいことはさせたくないし、いつもハッピーでいてほしいんだよ。木も、自分を必要としてくれてうれしかった

んじゃないかな。」

と、言われました。一回目は切り株になってしま
うのが悲しいと思っていましたが、それを聞いて
私も、木は最後まで少年の役に立てて幸せだった
のではないかと思うようになりました。

私は小さいころからたくさん絵本を読んでき
ましたが、今読み返したら今度はどのように感じ
るのが気になってきました。なので、好きだった
本を探して、もう一度読んでみようと思います！

〳柳田邦男先生からのメッセージ〳

絵本でも童話でも、あるいは大人になって読む
小説でも、一度読んだだけでは、その物語の深い
意味を理解することは、たやすくはできないもの
です。同じ物語を、二度、三度と読み返すと、読

むたびに、新しく気づくことがあったり、隠され
ていた意味をくみ取ることができたり、時にはは
じめに読んだときと反対の印象を受けたりするこ
とさえあるのです。

沖田さんは、『おおきな木』という絵本を、三度
も読み直したのですね。この絵本は、むずかしい
言葉は使われてないし、物語の展開も簡単です。
おおきな木は、一人の男が子どもの頃は見守って
あげる。男が青年になると、幹の一部を提供して
ボートを作る材料になってあげる。さらに男が家
庭をもつと、木は幹から枝まで全身を切り倒され
るのを認めて、家の建築材料になり、切り株だけ
が残る。男が年老いてやってくる、切り株は腰
を休ませる椅子になってあげる。この絵本は、す
ーっと読むと、それだけのお話として終わってし

子どもの部

まう。

しかし、沖田さんは読み返すたびに、この絵本から違う印象を受けたのですね。

はじめて読んだときには、木が切り株になるまで自分のすべてを男に与えてしまい、最後には切り株だけになってしまったことがせつなくて泣いてしまったという。

しかし、二度目に読んだときには、男の身勝手に腹が立ったという。

そして、三度目には、木が自分のすべてを男のためにあげてしまい、それでいいと思うほど大きな木の愛に感動したというのですね。しかも、ただ感動しただけでなく、そういう木の愛がお母さんのように思えて、お母さんの感想まで聞いたのですね。そして、子の幸せを願う母親の気持ちを

考えると、木はたとえ最後に切り株だけになってしまっても、男のためになれて幸せだったのではないかと、最初に読んだときと正反対の理解の仕方をするようになった。

こういう読み方こそ、本の内容を深く読み取ることを可能にするとともに、深く理解したことを忘れられない学びとして、しっかりと記憶に刻むことにつながっていくのです。

沖田さん、幼い頃に読んだ絵本を読み返して、今度と同じような気づきがあったら、ノートに書いておくといいですよ。

多くの子どもたちに、このような本の読み方をすすめてたくて、沖田さんのおたよりを絵本大賞に選びました。